
人形師の涙

玄奘 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形師の涙

【Nコード】

N0115H

【作者名】

玄奘 蒼

【あらすじ】

「お願い！わたしと……ローシェを、助けてえ！！」そう言っ
て飛び出してきたのは、喋って、動く、生きた人形だった。これから
始まるのは、ある双子の少女達と命を宿す人形の、不思議な石をめ
ぐるお話……。

プロローグ（前書き）

初めての作品で拙い文章力ですが、どうぞお付き合い下さい。

プロローグ

私は、娘の誕生日に人形をプレゼントしようと、とある一軒の小さな店へとやって来た。

カラン、カラン。

店の扉に付いたベルの音が響く

「あら、お客さんかしら？」

深い緑の眼、金色の長い、きれいな髪をした女性が出てきた。

店主と思われるその女性は、私を店の中へと招き入れてくれた。

私は、娘にプレゼントする人形を選ぼうと、綺麗に並べられた人形を見て回った。

ぐるりと店の中を回ってみたが、一目見て、すごいと思った。

私は、あまり人形には詳しくないが、恐らく彼女が作っていると思われるこの人形たちは、本物の少女と見間違えるほどに可憐で、魅力的だった。

「すごい……………」

私は口に出して呟いていた。

「気に入っていただけましたか？」

人形を抱きながら、にこりと彼女は微笑んで私に言った。

私は、はっとした。見入っていて気づかなかったが、すぐ後ろまで来ていたらしい。

「ええ、とても！　こんなに素晴らしい人形は初めて見ましたよ」

その言葉は本心から出たものだった。

「そう言ってもらえると、やっぱり嬉しいものですね」

照れながら言う彼女は、人形を抱きなおす。

私はふと、女性が抱いている人形が気になり、目をやった。

「これは……………」

そう言ってまじまじと見つめる。

その人形は、店の中のどの人形よりも愛らしく、どの人形よりも本物の少女に見えた。

見れば見るほど本物の少女に見えてくる不思議な人形。

「この子ですか？ この子は……売り物では無いんですよ」

そう言って彼女は、いとおしそうに人形を見つめた。

「私の一番最初の作品で、一番のお友達だったんです」

人形を見つめる彼女の瞳は、とても優しくかった。

「お客さん、もし時間があるのなら、私の話を聞いてはくれませんか？」

急に彼女は言い出した。

私は好奇心から快く承諾をし、彼女が案内してくれた、少し奥にあるソファに腰掛けた。

彼女は紅茶を用意してくれ、私の向かい側に腰掛ける。

「他の人に話すのは久しぶりなんですけど……私の大切な、とても大切なお友達が教えてくれたお話なんです……」

女性は、抱いている人形の茶色く、軽くウェーブのかかった髪を撫でながら、ぽつり、ぽつりと話し出した。

——これから始まるのは、ある双子の少女達と命を宿す人形の、不思議な石をめぐるお話……——

第一話：遺品整理

とある街のとある家にて

「「ごちそうさまでした！」」

元氣な声が重なり、続いてカチャカチャと皿の重なる音が響く。
声の主は十四歳位の少女二人、どちらもほとんど同じ顔である。見
分けるには髪型位しか無い。

「ひなたちゃん、ひよりちゃん、美味しかったかい？」

そう言って微笑みながら二人に声を掛けたのは、七十歳くらいのお婆さん。どうやら二人の祖母のようだ。

二人の名前は「ひなた」と「ひより」というらしい。

ひなたとひよりは揃って「美味しかった！」と言い、食器を洗って片付けていた。

「……今日も、行くの？」

少し遠慮した声で祖母は尋ねる。

ぴたり、と食器を片付けているひなたの手が止まり、後ろで1つに括った髪を少しだけ揺らしながら

「うん。まだ終わってないから行くよ。たぶん、今日で終わると思う」

と言い、片付けを再開した。

片づけを終えた後、ひなたはすぐに『支度をする』と言って部屋に閉じこもり、鍵を閉めてしまった。

一人取り残されたひよりは、一言「ひなちゃん……」と呟き、扉越しに座り続けた。

二時間くらい経った頃だろうか、部屋から出てきたひなたと共に、ひよりは下の部屋に下りてきた。

「そろそろ時間だから、行ってきます」

「いくら近いとはいえ、事故には気をつけるんだよ？」

「はい！」

ひよりは元気に返事をするが、ひなたは一言も喋らない。

「ひなちゃん、行ってきます位は言おう、ね？」

「……うん」

「行ってきます」「……行ってきます」

二人の少女は一緒に出かけていった。

「行ってらっしゃい……」

祖母はしゃがれた声で、そう言った――

ある場所に着くまでの暫くの間、ひよと話をしていたら、随分と気が晴れてきた。

さっきまでの気分が嘘のようだった。

それから五分くらい歩き、ようやく目的の場所に着いた。私にとって忌まわしい記憶のある場所。

小さな門があり、草が勝手に伸びている庭、前より少し黒ずんだ外壁、表札には『鳥遊』と書いてある。

そう、私の家だ。

隣ではひよが「大丈夫？」と心配している。

そうだ。ひよはもう、立ち直ったんだ。私だって頑張らなきゃ！

私は覚悟を決めて、ひよと家の中へと入っていった。

今日、私達がここへ来たのには、理由があった。

《遺品整理》それが目的。

私達は半年前、交通事故で両親を亡くし、おばあちゃんの家に取り取られた。

引き取られてから何回か、ここへ来て遺品整理を行った。

残りはあと一部屋。

でも、その部屋には……

久しぶりの家は、どこか埃臭い。

私達は二人で最後の部屋のノブを握った。

「せーの、でいくよ？ ひなちゃん、本当に大丈夫？」

「うん、頑張るよ……！」

「「せーの！！」」

扉が開いた。

私はひよの手を握り、一步、また一步と進んだ。その部屋の奥には、沢山のアンティークドールがあった。ざっと三十体くらいはあると思う。

私は、叫びだしそうな衝動に駆られた。

——我慢して、私。ここで叫んだら、さっきの覚悟は何になる？

――

私は我慢して、ひよと一緒に人形をまとめていた。

残り、あと十体くらいになった頃、その中でひとときわ目を引く人形を見つけた。

……嫌、コレだけは見たくなかったのに。

その人形とは、パフスリーブのワンピースで、白い襟には黒いレース、スカートの裾には白いレースが付いたドレスを着た人形だ。しかしその人形は、ドレスには似合わないボブの髪に、左の目に黒い眼帯をして、右手には人形とほぼ同じくらいの大きさの鎌を持っているという、おかしい格好をしていた。

その人形を見た私は震え出した。

いやだ、見たくない。

その瞬間、あの日の光景を思い出す。

横になったまま、少しも動かない両親。

左目の割れた人形。

もう、我慢できない。

「嫌ああああああ!!」

私は悲鳴をあげ、これ以上この部屋に居ることが出来ずに駆け出していた。

「ひなちゃんッ!!」

後ろでひよが叫んでいる。きっと、いや、絶対心配してる。
ひよ、ごめん。やっぱり無理だったみたい……。

「はあ、はあ、はあ……」

今私が居る部屋は、半年前、お父さんとお母さんが使っていた部

屋だ。

「人形なんか……嫌い………」

前にはこの部屋に、少しの人形とそれに関係のあるものや、お母さん達が使っていたベッド、お父さんの本、それに思い出がつぱいあった。

それなのに今はもう、何も無い。

「……もう、何もないんだね」

ぽつりと、口から言葉がこぼれた。

目からは涙がこぼれてきた。

ぽたり、ぽたり。埃まみれの床に、いくつかの丸い染みができる。

「戻りたい……」

覚悟を決めて、この家に来たはずなのに。
だめだった。私は、あの人形から逃げ出した。

「幸せだった……あの頃に」

どうしてもあの人形を見ると、あの時の事を思い出す。

どうしてお母さんが死んだの？ どうしてお父さんが死んだの？
その理由をあの人形と結びつけるのは簡単だった。

だって二人が死んだのは、あの人形を迎えに行ったせいだったから……

「戻りたいよお……!!」

こんなことを願っても、意味が無いことは分かっている。失ったものはもう、元には戻らないのだから。

それでも私は、そう願った。

その時だった、何か声が聞こえたのだ。

『……………て』

「……………ひよ？」

尋ねてみるが、何の返事もない。

「何？ 何なの？」

ひよじゃ、ない。

私達よりも幼い声。

最初は小さくて、よく聞こえなかったその声は、はっきりと聞こえるようになってきた。

『……………けて』

「誰なの！？ 何処に居るの？」

何者かすらわからない声

—————怖い。

『誰か……………！』

その声のする方へ振り返ると、今までは無かったはずの古く、埃を被った本があった。

「こんな本、さっきまで無かったのに……」

どうやらこの声は、ここから出ているらしい。

『誰か助……て……聞こえたなら返事をしてえ!』

好奇心がうずく。

私は恐怖心を忘れ、誘われるように本を手にとり、開いた。

「なに、コレえ……」

そこには挿絵のようなものがあり、その横に読めない文字らしきものが書いてあった。

挿絵は魔方陣のようだ。私はなぜか、それを指でなぞっていた。すると、いきなり本が光り出し、頭の上に大きな魔方陣が浮かび上がった。

「え………?」

私は状況についていけずただ、茫然としていた。おかしな魔方陣の中から声がする。

『繋がったの!?!』

茫然としている私の上にどさり、と何かが落ちてきた。

「わあ!」「きゃあッ!」

私の後に続き、それは悲鳴を上げた。

「痛っ……」

私は痛む所をおさえながら体を起こす。
前を見て私は、啞然とした。

薄い茶色で、軽くウェーブのかかった、肩までの髪

深い、緑色の瞳。よく見知ったグラスアイだ。

白い肌、上気した頬、ピンク色の軟らかそうな唇

クリーム色のドレス。袖口を絞っており、胸元からドレスの裾まで伸びる、二本の白いレース。

膝までの丈、裾にも白いレース。

首元には白いリボン。頭の横にはドレスとおそろいの、クリーム色のリボン。

白い靴下に黒い靴。

そして、靴下の少し上からのぞく球体関節。

それが口を開く。

「お願い！ わたしと……ローシェを、助けてえー！」

今にも泣き出しそうに顔を歪めながら、それは言った。

「人形……!？」

私は自分の見たものが、信じられなかった。

——だってその人形は、生きてるように動いていたんだ。

第二話…エデンという世界

私は、目の前で起きたことが信じられなかった。だって今、目の前にいるそれは『人形』のはずなのに、それなのに、生きているように動き、喋るんだから！

人形は動かない。それが普通、それが当たり前なのだから。誰だってこんなこと信じられるはずないでしょ？

「人形……！？ 何で？ どうして？ どうして人形が動いて、喋ってるのよおッ！？」

震える声で尋ねる私の声は、もう悲鳴に近かった。

ああもう、こんな事になるなら本なんか開かなければよかった……！

私は何がなんだかわからず、混乱していた。

「私、私は……！」

今にも泣き出しそうな顔で、人形が何か言おうとした。その時だった。

「ひなちゃん！ 大丈夫……ぶ……？」

ひよが部屋に入ってきた。そして、喋っている人形と私を交互に見ると、固まった。

「人形が……喋って……動いて、る？」

最初、私は信じられなかった。だって、ひなちゃんと人形がいて、その人形が喋って、動いていたから。

「ひよお……」

人形って、喋ったり動いたりするものだったっけ？ 確か違ったと思うけど。

私はひなちゃんとお人形さんを見た。

ひなちゃんは取り乱してる。もう、ほんとに頼りないお姉ちゃんなんだから。お人形さんのほうも取り乱してるみたいだけど。

私はびっくりしつつも質問してみることにした。

「ひなちゃん、この子はどうしたの？」

私は人形を指しながら尋ねる。

「ある筈の無い本を開いたら……助けて、って出てきたの………」

「そっか、じゃあそっちのお人形さん、お名前は？」

「わたしは……ソレイユ！ お願いだから、助け……」

「ストップ！ ちょっと落ち着こう？」

ひなちゃんはもう、落ち着いたみたい。後はこのソレイユちゃんだ。

「とりあえず、何でもここに来たのか、どうして動いて喋っているのかを教えてください？」

こくり、とソレイユちゃんがうなずいてくれた。やっぱりお人形

さんなだけあって可愛いなあ。

そんなことを考えていると、ソレイユちゃんが言い出した。

「あの……、話をする前に一つだけ約束してほしいことがあるの」

約束？何か変な事じゃなきゃいいんだけど……。

「もしも、レイの話を聞いて信じてくれなかったり、レイの力になつてくれないのなら……この事は、忘れてほしいの」

そういつて寂しそうに微笑む

「分かった。そのこと、約束するね」

私がそう答えると、ソレイユちゃんがぽつり、ぽつりと話し出した。

レイは、この世界とは違う、エデンと呼ばれる世界から来たの。

ここから見た異世界、みたいなのかなあ？

エデンには天界・人間界・冥界があるといわれているの。まあ本当にあるかは誰にもわからないんだけどね。

そして一つの大陸しかなくて、こっちにある国とかいうのが無いの。だからみんな同じ言葉を使っていて、同じような外見なの。まあ地方ごとに治めている人はいるんだけどね。

レイが作られたのは、人間が住んでいる場所の、フェルイールと

呼ばれてる街の小さなお店。その店主の、おじさまとおばさまの娘がローシェって言ってね、その子がレイのお母さんなの。

こっちとエデンと大きく違う所は、エデンにはエルフとか妖精とか精霊みたいなのが住んでいる場所があるの。まあ普通の人なら近づこうとはしないんだけど。

エルフには不思議な力があって、寿命が長かったり、魔法が使えたりするの。でも、その中でも一番不思議なのが『エルフの涙』なの。

エルフの涙っていうのは、エルフの中でも稀に見る希少種が持っているもので、その希少種が流す涙は、宝石になるの。感情によって種類が変わるっていう珍しいもの。とても力が強くて、エルフが高度な魔法を使う時に力の足しにするの。

それだけじゃない。その宝石にはとても不思議な力があって、特別な宝石になると、物に命を宿したりできるのよ。普通の宝石でも物を自由に操ることができるの。

使い方を誤れば、とても危険なものにもなるのよ。

でもローシェはおばさまがエルフなだけで、希少種でもなんでもない筈なの。

しかも、おばさまが言うには、ローシェは本当はエルフの力が弱い。おばさまからはエルフの髪と目の色しか受け継がなかったし、成長の早さも普通の人間と同じだし、何より魔力が無いのよ。

だけど、何故かレイが作られた日に、エルフの涙が目覚めたの。レイが作られたのは、ローシェが十歳の時だったわ。

ローシェにとって、レイは最後まで完璧に作れた初めての人形だったの。ローシェは嬉しくて泣いてた。

最初は普通の涙だったわ。……でもだんだんと涙が宝石になっていて、ローシェの周りには数粒の宝石が散らばっていった。

おじさまもおばさまもローシェも、皆驚いた顔をしていたわ。そして、散らばった宝石の中に一粒だけ、他の宝石よりも少し大きいものがあつたわ。薄桃色のそれは、特別な宝石だった。嬉しさの感情だったの。

それからはあつという間だった。その宝石は出来上がったばかりの、レイの体に入ってきたの。胸の辺りがじんわりと温かくなって、次の瞬間、動くことも、話ができるようにもなつてた……。

それから、レイのほかにもう二体、宝石に選ばれたお人形が居るわ。特別な宝石は、宿主を選ぶみたいなの。

それから三年は何事も無く、平和に過ぎていったの。

……でも、平和な時間はそこまでだった。

ある日、誰かに店が襲われたの。ローシェとおじさまが作ったドル……レイ達のお友達も、みんな、みんな、滅茶苦茶にされたわ！レイは賊がお店を壊しながら『エルフの涙はどこだ』って言うていたのを聞いた。

レイ達はおじ様、おば様と、ローシェの前以外では、動いたり、喋ったりしちゃダメっていわれてたの。もしも見つかったら、貴族の見世物にされるか悪用されるかのどっちかだ、って言われたから。

何故そのことがばれてしまったのかは分からない。でもローシェは連れて行かれてしまったわ。

レイ達は、おじさまに隠されていたおかげで無事だったの。だけど、襲われたときに、おじさまは足に怪我を負ってしまい、おばさまはショックで体調を崩してしまったのよ。

今は、もう二体のドル……シェリアとナイトが店を守っているの。

あいつらは、きっとエルフの涙を悪用するわ。でもローシェを助けようにも、最初の頃は何にも手がかりも無くて、助けてくれる権力を持った人も居なかった。

こう言っちゃ何だけど……今のエデンの貴族は腐ってるのよ。私腹を肥やすばかりで他には何もできない！

だから、別の世界があるって話を聞いて、だから……繋がる人を探したの。

レイは別の世界で助けてくれる人を探すために、おばさまの魔法書を読みあさったんだ。エルフの魔法には良いものが沢山あるのよ。でも、それから1年間は何にも進展が無かった。

繋がったとしても、信じてくれる人は一人もいなかった。中には変な人もいたけど……身の危険を感じて逃げ帰ってきたの。怖かったわ。

それで、諦めかけてたらここに……

「だから……お願い！ ローシェを助けていの！」

確かに、こんな話いきなり信じるって言うのは難しいよ……

私は内心、そう思っていた。だって、ねえ？それに……普通の、一般人の私達に何ができるっていうの？

でも、信じてないわけには……いかないよね。実際、目の前で動いて、喋ってるんだから。できれば助けてあげたいんだけど……どうしよう……でも、でもおっ！

私は迷っていた。

ソレイユちゃんはたぶん、本当の事を言っているんだと思う。で

も、私達に何をしろっていうの？

「うー……」

どうしよう、どうしよう！ ソレイユちゃんが泣きそうな顔してる！

とりあえず考えさせてもらおうと、ソレイユちゃんに「ちょっと待って」と言おうとした。

その時、今まで黙っていたひなちゃんが口を開いた。

「勝手なこと言わないで!!」

ひなちゃん！ 何を言ってるの！

「こんな風に来られたって迷惑なの！　すぐに帰って！」

お人形さんが嫌だからって、それは言いすぎだよ！

「ひなちゃん」

「人形なんか嫌い！」

「ひなちゃん！」

「大ッ嫌い！　出て行って！」

「何処に行くの!？」

「帰る！」

そう言うひなちゃんは荷物を持ち、部屋から飛び出していき、残された私とソレイユちゃんは顔を見合わせた。

「……ごめんなさい、やっぱり、迷惑だったよね？　すぐに帰るから、だから、レイのことは忘れて？」

やーん、そんな悲しそうな顔しないでよお!!

「さっきの子、人形が嫌いなんでしょう？　だったらレイが居ても迷惑だから……」

……ん？　ちょっと待てよ？　もしかしたらコレは、ひなちゃんの人形嫌いを直すいい機会なのかもしれない。

「ちょっと待って？」

「え……？」

ソレイユちゃんはびっくりしてるみたい。

そりゃあ、そうだよ。出て行け、って言われたのに、待って、なんて引き止められたら。

「ひなちゃんは……今、あんなこと言ったけど本当は、誰よりもお人形さんが好きなんだよ？」

「でも嫌いって、出て行けって……」

「今はそう言ってるけど、ほんととは違うの。ただ、お人形さんに対して、ちょっと心を閉ざしちゃっただけ」

「何で……何で、そんな事が分かるの？」

分かるよ、どうしても分かっちゃうんだよねー。
だって

「双子、だからね。」

私は少し、微笑んでそう言った。

ソレイユちゃんが、驚いた。どうしたのかな？

「……名前、何て言うの？」

そういえば、名前、言ってなかった。

「私はね、ひよりっていうの」

「あのね、ひよりに……お願いがあるの」
「ん、どうしたの？」

お願い？ 何だろう？

「……ぎゅって、して？」

上目使いでこっちを見つめてくる。か、可愛い！

私は、その通りに抱きしめてあげた。こんな可愛いお願い、断れるわけないもん。

「あのね、ひよりは……ローシェに、似てるの………」

「そうなの？」

「顔と違ってわけじゃないの……雰囲気、笑ったときとかが、似て……」

そっか、なるほど。ローシェちゃん？ が恋しくなったのか。

「ローシェちゃんが、恋しくなったの？」

こくりと、ソレイユちゃんがうなずいた。

「わかった、ソレイユちゃんが寂しくなくなるまでぎゅってしてあげるから……」

「……レイ、って呼んで？　今だけでいいの。ローシェは、いつもそう呼んでくれるから」

私は腕の中で小さく抱かれているお人形を、とても愛しいと思った。助けてあげたいと思った。

「レイ、私が絶対に助けてあげる。ローシェちゃんを、絶対に」

私は覚悟をした。どんな事に巻き込まれるか分からない。だけど絶対に助けるんだ。この、腕の中に居る、寂しいお人形のためにも。

「だから、レイも、ひなちゃんの心を開けてあげてね？」

私は頭を撫でながら言った。

「うん……」

レイは小さく返事をして、手に頭をすりよせた。

「うちにおいで？　おばあちゃんならきつと、喜んでくれるから……」

先に帰ったひなちゃんを心配しつつも私は、可愛いくて寂しいお人形、レイを抱きしめていた。

第三話…死神人形

私は、家へ帰ってすぐに、埃まみれの体も洗わずに部屋へ飛び込んだ。

おばあちゃんが心配している。

「ひなたちゃん？　どうしたの？　大丈夫？」

そんな声を見無視して私は、部屋に鍵をしてうずくまった。

「……勝手なこと、言わないでよ………」

また涙が溢れてくる。

「あはは、私って……泣き虫だなあ。　ひよはあんなに強いのに……」

拭っても拭っても出てくる涙。

「人形なんか嫌い……大ッ嫌い………」

あの事故から半年も経ったのに、まだあの人形を見ると思い出す。

「あんな死神人形、居なくなっちゃえばいいのに！」

あの人形のせいで、お母さんとお父さんが死んだんだ。半年経った今でも、あの日のことはハッキリと覚えてる………

「ひな、ひよ？ 今日だね、うちに新しいお人形さんが来るのよ！」

お母さんは人形が好きだった。私も人形が好きだった。昔、よく人形を集めては、お母さんとひよと私の三人で遊んだものだ。

お父さんは「自分だけ仲間外れで寂しい」って言ってたっけ。

その日お母さんは、人形が来ると言って大騒ぎをしていた。その人形は、お母さんが掘り出し物を見つけた、と言って喜んでいたものだった。

私とひよも嬉しくなった。新しいお人形はどんな子だろうとしきりに話し込んでいたくらいだから。

「今日はどんな子が来るの？」

ひよは待ちきれなくなったらしく、尋ねていた。

「可愛い子よお、黒いロングヘアの女の子なの！」

「楽しみだね、お母さん」

「イメージは死神の女の子なんだって」

死神か……ちょっと不吉だけど、やっぱり可愛いんだろうな。

私は期待に胸をふくらませながら、迎えに行く時間になるまでひよと話をした。

「さ、みんな乗っ……」

お父さんが言い切る前に、もう既にひよと私とお母さんは車に乗り込んでいた。

「随分と準備がいいな……」

お父さんは苦笑しながら最後により込んだ。お父さんは運転席、お母さんは助手席。私とひよが後ろに座った。いつもの場所だ。

「早く出発しようよ!」

私は、我ながら子供っぽいなあ、と思いつつもせかしていた。

車の中では、人形の話をしたり、どんな名前にしようか、としきりにひよと話した。

「どんな名前がいいかな?」

「私は……可愛い名前がいいかなあ」

「でもイメージが死神じゃん」

「それでもいいの! ひなちゃんだって可愛い好きでしょ?」

「う……まあそうだけど」

可愛い名前かあ、何かあるかなあ?

「じゃあ、決まっていなかったらお母さんが決めちゃうぞ!」

「「えー!!」 お母さんずるい!」

「なによ、お母さんだって決めたいんだもん!」

自分の母親ながら子供っぽいと思う。(自分もだけど)

……二時間くらいそうしていただろうか、私達一家は小さなお店に着いた。

「いらっしゃい、よく来たねえ」

人の良さそうなおじさんが迎えてくれる。この名前は「佐伯工房」主にアンティークドールを作っている。

ここには、可愛い人形がいっぱいあるから、よく来るの。

「佐伯のおじさん！ 久しぶりです！」

「今日はひなちゃんもひよちゃんも一緒なのか」

もう名前だって覚えられてる。

「「はい！」」

私たちは同時に返事をし、店の中に入れてもらった。

「わあ……！」

やっぱりいつ来てもすごい。可愛いお人形が沢山ある。綺麗なドレスを着て、幸せそうに微笑んで……やっぱりここのお人形さん、幸せなんだろうな。

ひよはそんな風にうっとりとしている私を見て、私の変わりに尋ねてくれた

「あの、受け取りに来たお人形は何処なんでしょうか？」

「あ、忘れてた。あんなに車の中ではしゃいだのに。」

素で忘れてました。

「はっはっは。そうかそうか、あの子かぁ。今連れてくるから少し待っててくれるかね」

そう言っておじさんは工房の方へ行った。私とひよとお母さんはわくわくしながらそのお人形を待った。五分くらいだろうか、おじさんが一体のお人形を抱いて戻ってきた。

「ほれ、この子だよ」

その子は、真っ黒なストレートのロングヘアーで銀色の瞳、フリルやレースの沢山ついた黒いドレスを着ていて、とても可愛らしい姿で抱かれていた。

「わぁ……可愛い！」

一目見るなり、私もひよもお母さんも気に入った。

「この子にはこれを持たせるんだよ」

そう言って佐伯さんは人形と同じくらいの大きさをした鎌を出してきて、人形に持たせるように置いた。もちろん草刈用の鎌では無い。とても綺麗で細かい細工がしてあり、よく絵に描いた死神が持っているような形をしている。

「すごい、ほんとに死神みたいだね！」

「そりゃそうだ！ おじさんが作ったんだから」

そう言ってニカッと笑う。

……あれ？

人形が微かに笑ったような気がした。多分気のせいだよね、気のせい。

その後は帰る時間になるまで、他愛の無い話をした。楽しい時間はあっという間に過ぎていく。

「おじさん、さよなら」

「今日は本当にありがとうございました」

「また来ます」

最後の挨拶をし、そろそろ出発をする時だった。車に乗った私達におじさんが話し掛けてきた。

「ひなちゃん、ひよちゃん、この子の事を絶対に幸せにしてあげてくれよ。悲しい思いも、寂しい思いもさせないでくれ。人形にだって命はあるんだからね」

「うん、分かった。絶対に約束する」

「大切にするもんね」

「ね！」

私達は人形を見た。この子がうちに来ると思うと、胸が高鳴った。

その後はおじさんにお礼を言って出発をした。少し時間が遅れていて、お父さんはいつもよりスピードを上げていた。

私とひよは、お人形を二人の間に座らせながら話をしていた。

「そういえば、結局名前、まだ決まっていなかったよね？」

「うん、どうしょっか？」

ああでもない、こうでもない意見を出し合うが、結局いい名前がなく私の興味は窓の外へと移った。

「ねえひよ、寒いけど外の景色綺麗だよ、ひよも窓開けない？」

「本当？　じゃあ私も開けるー」

「ひなた、ひより、寒いから閉めましょうよ……」

前の席ではお父さんとお母さんが文句を言っている。

そんな他愛の無いやり取りをしながら、私達は車に揺られていた。そして事故が起きた。

最初は何が起こったのか分からなかった。いきなり車に衝撃が走り、次の瞬間、私は車から投げ出されていた。

「ッ!？」

肩から地面に叩きつけられたせいで、痛みで片腕が動かせなかった。

そこで、ようやく私は事故に遭ったのだと気づいた。私の反対側には、ひよが倒れていた。ひよも投げ出されたらしい。目の前では車が燃え出している。

「ひよ、ひよ！　起きて！　どうしよう、車が……車がぁッ!!」

私はひよりの方まで近づいた。片腕でひよをゆすり、起こそうとした。が、起きる気配がない。

「ひより、起きて、起きてよ……死んじやだよ！」
「ん……うう……」

まだ起きてはいないものの、微かにうめいたのはわかった。よかった、ひよは死んでない。

周りに車や人が集まってきた。

そこで私は大変な事に気が付いた。お父さんとお母さんが居ないのだ。車の外には投げ出されていないように姿が見えない……ということは、まだ車の中に居るらしい。

「お父さん、お母さん！」

車にはお父さんとお母さんを助けようと、何人かの人達が二人の腕を引っ張っていた。

私が行っても邪魔になるだけだとは分かっていた。わかってはいたけど、どうしても二人の無事を確かめなかった。

「おい！ 危ないから離れてろ！」

「こっちに来ちゃダメだよ！」

誰かが自分に向かって叫んでいたけど、無視した。私は肩を押さえ、ふらふらとおぼつかない足取りで燃えた車に近づき、そして覗き込んだ。

熱い！ そう思った瞬間、絶句した。車の中は私にとって地獄だった。

前の座席にはお母さんとお父さんがいた。

それぞれ二人の額は割れ、血がだらだらと顔を伝っていた。意識は無い様でぐったりとしている。顔には血の気が無く、青くなっていた。

「い……嫌だよそんなの、そんなのやだぁッ!!」

私は泣き叫んでその場に崩れた。すると誰かが私を抱き上げ、車から遠ざけた。

「嫌だ! お父さん! お母さん!」

必死に抵抗するも、目が霞んできた。急に瞼が重くなる。

「い……や……」

車の方を向くと、座席にひっくり返ったあの人形が見えた。ドレスは所々焼けていた。髪も焼けて、あんなに長かった髪が短くなっていた。目は事故の衝撃だろうか、左目が割れていた。

残った右目だけでこっちを見る。

閉じようとする意識の中、私が最後に見たのはそれだった。

朝目がさめると、私とひよは病院にいた。もう何日も寝ていたらしい。

そこで両親の死を聞かされた。何でもトラックとの衝突事故だったらしく、相手の居眠り運転が原因だったそうだ。お父さんもお母さんも、相手も即死だったらしい。

おばあちゃんが来て、私たちを抱きしめてくれた。お母さんも、お父さんも、もう、居ない。私とひよは泣きじゃくった。

午後になった。もう涙は枯れ、喉も枯れ、後は腫れぼったい目だけが残る。

私は窓の外を覗いた。まるで今の自分のように、どす黒い雲が空

を覆い、たくさんの雨を降らせている。

外が暗いため、窓を鏡代わりにして自分の顔を見た。

「……酷い顔してる。目、冷やそ」

目を冷やそうとベッドを降りようとした時だった。窓にきらりと光る目が見えた。

「!!」

真っ先に思い出したのはあの人形と、両親の姿だった。俗に言うフラッシュバックとかいうやつだ。

最後に見た人形の目が瞼に焼き付いてはなれない。

「やだああ!」

私の悲鳴を聞きつけて、すぐにおばあちゃんが駆けつけてくれた。私はおばあちゃんに抱きしめられながら震えていた。

「大丈夫、大丈夫だから……」

「お母さんが……お父さんが……」

「おばあちゃんが居るから、大丈夫だよ」

どのくらいそうしてもらっていたか、まだしゃくりあげてはいたが大分落ち着いてきた。そして震える声でたずねた

「あ……あの人形は？」

おばあちゃんは少し気まずそうにしながら、ベッドの下の方を指差した。

「捨てない方がいいと思ってねえ……でも凄く酷い状態なんだよ」

その方向を見ると、人形が座っていた。姿はあの時のまま。割れていない右目で私を見ていた。

ぞわりと全身の毛が逆立ったような感覚、そしてやっぱりあの光景を思い出してしまう。

「ひなたちゃん……ひなたちゃん……」

おばあちゃんがさっきよりも強く抱きしめてくれる。

「この人形が居たから……この人形を迎えになんて行っただから……」

こんな事を人形にぶつけても意味が無いのは分かっていた。分かっていたけど、原因のトラックの運転手は死んでいて、どこにもこの恨みをぶつけるものがなかった。でも何かにぶつけないと、自身自身が壊れてしまいそうで。

「人形なんて嫌い……大ッ嫌い……こんな人形、無くなっちゃえばいいんだ」

気が付けば私は、そう呟いていた。

第四話：瞳

結局、ひなちゃんが居なくなっちゃったせいで、片付けは終わらなかった。

そして、異世界から来たという人形、レイちゃんを連れて、家に帰ることにした。

今はその帰り道。

色んな事が重なって、私はまだ、ぼーっとしていた。

ひなちゃん……また部屋にこもったりしてないかな？

こんなに遅くなっちゃっておばあちゃん……心配してるよね？

それに急に曇ってきた……もう梅雨の季節だし、雨が降りそう。

ああもう、早く帰らなきゃ！

ぼーっとしながらそんなことを考えて、レイちゃんと帰り道を歩いていた。

それがいけなかった。

「ひより！ 前！」

ぼーっとしながら考え事してた私が馬鹿でした。

レイちゃんが何か言ってたけどすでに遅く、私は電柱におでこをぶつけていた。

「……痛い」

こういうのって地味に痛いんだよね……

「ひより、大丈夫？」

私がおでこをおさえながらしゃがみこむと、レイちゃんが心配してくれた。いい子だなあ。

「うん……たぶん、平気」

そう言って私は立ち上がった。

……やけにおでこが痛い。

私はポーチを引っ張り出して鏡を取った。

鏡を覗いてみると、痛みの理由がわかった。

「傷になってるしい……。」

おでこからは血が滲んでいて、そこに触れた手にも血が付いていた。

どうりでおでこが痛いわけだ。帰ったら早く消毒しておかないと。ばい菌が入るのはいやだし。

でもその前に、この血で汚れた手をどうにかしたかった。しかしこの近くに水道は無い。

「早く帰ろっか？」

仕方が無いので帰ることにした。水が無いことには手も傷口も洗えないのだから。

私はレイちゃんと一緒に家へと急いだ。

ガチャリとドアの開く音がする。ひよが帰ってきたんだろう。

「ただいまー」

ばたばたと騒がしい。

うるさいなあ……もうちょっと静かにできないのかな？

「おばあちゃん、いるー？」

ちょっと前に近所の人と買い物に出かけた。でも教えない。どうせおばあちゃんがメモを残してあるだろうから。

私が心の中でそんなことを思いながら、その声を見殺した。

それから少し時間が経った。時計を見ると、もう七時半を過ぎていた。

そういえばご飯、まだだったなあ……

「おなか……すいた」

もう今日はこもるのやめて出ようかな。そう思わせる程おなかの限界が来る、という時にぱたと階段を上がる音が聞こえてきた。

「ひなちゃん、部屋にいる？」

ひよか。何だろう？

「何？」

「ちょっと手伝ってくれる？」

「何を？」

「料理」

ひよ……それは私の料理の腕を知った上で言っている言葉なの？

私は料理が壊滅的なほどに下手なのだ。

シチューを作ろうとするとカレー色になり、肉じゃがには、危うく自分の肉が入りそうになった事もある。

私の料理を食べると何日か胃薬が手放せなくなる事だってあった。

「無理。私が料理下手なのは知ってるでしょ？」

その代わりひよは、家事全般が上手い。人形の洋服だって手作りしていたくらいだから。

「分かってるよ。でもお願い、火を見てるだけでいいから！」

そこ、下手だって認めちゃうんだ。

でもまあ、それだけなら私にだってできるし、いいかな。

「仕方ないなあ」

これもご飯のため。そう思いながら私は部屋から出た。

部屋から出るまではよかった。

部屋から出て、一番最初に目についたのは、おでこが血だらけのひよだった。

「うわぁ！ 化け物！」

「ひなちゃん！ ひどいよお！」

「あ、ごめん……」

だって本当におばけみたいに見えたんだもん。髪ボサボサだし、血は口元まで垂れてきてるし。

「私だって好きでこんな格好してるんじゃないの！」

「っていうことは、またどこかにぶつけたの？」

「まあ……そうなんだけど。考え事してたら、ね」

何が考え事だ。私は呆れ返った。

ひよはよく、色々な場所に体をぶつける。いや、『よく』ではなく、ほぼ毎日だ。

すると私がそんな事を考えているのが分かったのか、それとも顔に出ていたのか、ひよが慌てて話を逸らした。

「と、とにかく火点けっぱなしだから早く！」

そう言うのと私の手を引いて階段を降りた。

リビングに入った瞬間、私は部屋を出てきたことを後悔することになった。

そこには私の今、一番見たくないモノがいた。

「……何で」

私は少しの間、固まっていた。

「何で、居るの」

そう、さっきの人形だった。確かソレイユとかいう名前で……エデンとかいう変な異世界から来た、動く人形。

その人形はソファに座り、こっちを見ていた。

「ひよ、連れて帰ってきたの？」

私はひよに詰め寄る。

「うん、悪かった？ でも当然の事をしただけ。」

「それは……そうかも知れど！ 私が人形嫌いなもの知ってるでしょ！？」

「知ってるよ」

「じゃあ何で？ 何で私のことを考えてくれないの？」

双子とはいえ、いつもひよは私のことを考えてくれていたのに。

「これもひなちゃんの為なんだよ？」

「私の為？ だったら人形なんか連れて帰って来ないでよ！」

私の一言に、ソファに座っていたソレイユがびくつとする。その後こっちを見て、悲しそうな顔をした。その時、気のせいだったのか、ソレイユの口が動いた気がした。

「人形なんかもう嫌なの！」

「ひなちゃんの嘘つき。ひなちゃんは人形が嫌いなんじゃなくて、人形が怖いだけなんですよ？」

「ち……違うもん！」

そんなの認めない。認めたくない！

「あの時のことを思い出すからでしょ？」

「五月蠅い！」

「ひなちゃんの弱虫！ 逃げ続けてたって変わらないよ！」

「ひよの————」

馬鹿、と言いかけた時、がちやりとドアが開いた。

「ひなちゃん、ひよちゃん、ただいま。おばあちゃん、ちよつと遅くなっちゃった。」

おばあちゃんが帰ってきた。私達は同時に振り向く。

「あらあら、どうしたの！？ 喧嘩でもしたの？」

そうなんだけど。……………そういえば私、何で降りてきたんだっけ？

「ああー！！！」

「うわぁ！ 何！？」

ひよが声を上げた。

びっくりした。どうしたんだろう。

「お鍋……火にかけっぱなしだった！」

そういえばさっきから何だか……焦げ臭いような……！

喧嘩してた事なんて忘れて、急いでひよと台所に向かった。

「「遅かった……」」

ひよと私の声が重なる。

鍋の中には、晩ご飯になる筈だった料理が真っ黒に焦げていた。

「もう……ひなちゃんが喧嘩売ってきたせいで料理が焦げちゃったじゃないの！」

「何それ！ 私のせいなの！？」

また騒ぎ出した私達を無視しておばあちゃんがお鍋の中を覗き込んだ。

「あらまあ……これまた真っ黒になっちゃったねえ。」

どうせ私のせいですよ。

「これじゃあ食べられないから、おばあちゃんが買ってきたものを食べようか？」

「はい……」

「とりあえずその前に、ひよりちゃん？」

「え、何？」

おばあちゃんは、ちょうどひよの足元を指差しながら訊ねた。

「その足にくっ付いているお人形さん、どうしたのかい？」

「え……？」

そう言って私もひよも、ひよの足元を見る。そこにはソレイユが、足の後ろから顔を出してこちらを見ていた。

「喧嘩しちゃ……いや」

「あらまあ、喋るのねえ。可愛いお人形さんだこと」

ソレイユがびくつとして、ひよの足に隠れようとするが、おばあちゃんに抱き上げられた。

「ひ……ひよお」

「そんなにびくびくしなくたっていいのよ。別にとって食おうとしてるわけじゃないんだから」

おばあちゃんが微笑みながら言う。

「おばあちゃん……驚かないの？」

おそろおそろひよが訊ねる。

「こんなことで驚くおばあちゃんじゃないよ。昔はもっとすごいのが居たんだから」

そう言つてにつこりと笑う。

すごいなあ……流石おばあちゃん。でも、もっとすごいのは一体何なんだろう。気になるなあ……

「それで、どうしたの？ このお人形さんは。」

「それは……」

ひよがソレイユを見る。おそらく、祖母にエデンの話をしてもいいのか分からないのだろう。

ソレイユは少し考えると頷いて言った。

「いいよ……ひよのおばあちゃんなら。たぶん、平気」

「うん、分かった」

そう返事をするひよは、昼間ソレイユから聞いた話を始めた――。

「……と、いう訳なんだけど、おばあちゃん、信じてくれる？」

一通り話し終わってからひよが訊ねる。

「確かに信じらるような話じゃないけどねえ……このお人形さんがここに居るんだから信じるしかないわねえ」

「ほんと！？　じゃあレイちゃんに協力してもいいの？　家においてあげてもいいの？」

「ええ。でも、危ないことは絶対にしちゃだめよ。これだけは約束して頂戴？」

「分かった。約束する」

「とりあえず、ひなちゃん……おばあちゃんご飯用意するから、おでこ消毒しておいで」

「はい。」

いつものように、私はひよの手伝いをしようとする。

「じゃあ私、手伝……」「レイちゃん、手伝ってくれる？」

「分かった、今行く」

私の言葉を遮って、ひよが言った。

ひよは救急箱を持ってきた。アルコールの臭いが鼻につく

ソレイユとひよがソファに座って消毒を始めた。

「どうやってやるの？」

「これは……」

楽しそうに話をしてる。

少し前なら……ソレイユの所に私が居て、ひよの手当てをしていたのに。

何だか変な感じ。

もやもやして、苛つく。

「ひなちゃん、ひなちゃんもおいで？」

ひよにソレイユがくっ付いている。何か嫌。

それに何でひよは人形ばかりなの、そんなの酷い。いつだって二人一緒だったのに。

「ひなちゃん？ どうしたの、早くおいでよ？」

私の気持ちも知らないで、そんなこと言わないでよ？

ひよなら私の気持ち、わかってくれると思ったのに。

「……………」

「ひなちゃん？」

ひよは何でそんな人形に構うの……？

私よりも……そんな人形のほうが大事なの？

そんな思いが頭の中をぐるぐると廻る

「……で、何でなの……………？」

不意に言葉が漏れる

それに気づいたのか、ソレイユがこちらを見た。

私と人形の目が合う。

「人形……」

その瞬間、周りの景色があの日と重なった。

「あ……」

——こっちを見ないで——

ひっくり返ってこちらを見る人形

「レイちゃん、ひなちゃん、どうしたの？」

ひよの声が遠くから聞こえた気がした。

こっちを見るソレイユの緑の目が銀色の目に見えてくる。

——その目で——

「……………何でひなたは」

——私を——

片目の割れた……………黒い髪の人形が……………私を、見つめる。

「そんな」

気分が悪い、頭がクラクラする。

——見ないで！——

「悲しい瞳をしているの？」

静かになった部屋に、雨の音だけが響く。

昼間あんなに晴れていたのが嘘のように、今は月の光も差し込まない。

ソレイユが私の所へ来て、頬に手を添え目を覗き込む。

「悲しい瞳は濁ったココロ 優しい瞳は清んだココロ」

呪文のように言葉を呟く人形

「ココロが泣いているの、助けてって」

グラスアイ
瞳に光が宿る。

知らない間に出てきた涙が、頬を伝っていく。

私を映している瞳は吸い込まれそうなほどに綺麗で———

私は人形が嫌なのも忘れ、ただ、ソレイユの瞳を見つめ続けた。

第五話：白い夢

……なんだか心地良いな。

ソレイユの目を見ているうちに、不思議と心が落ち着いてきた。

今はふわふわと浮かんでいるような感じがする。

さっきまでの感情は何処かへと行ってしまったように、心が軽い。

何だろう……何か、不思議な感じ。でも、このままでいたい。

もうずっとこのままでも良いかも……

私は、そんな事を思うほど落ち着いてきた。

あれ………？ でも……何か、何かを忘れているような。

何か……

すると、不意に自分の言った言葉を思い出す。

——人形なんて嫌い、大ッ嫌い！——

ああ、そうだった。

忘れていたのはこの事だったのか。

私は人形が————

「嫌ッ！」

そう言って人形を押す。

「きゃあっ」

「ひなちゃん！ レイちゃん！」

私は、床に座ったまま、ひよと人形を見る。

「今の……何なの」

ひよがソレイユを抱き上げる。

ソレイユはひよに抱かれて、こっちへ来た。

「今のはね、ちょっとだけ心を覗かせてもらって……少しだけ心を軽くしたの。」

「何それ……」

確かに、さっきよりも心が軽くなった気もしなくはないけど。

「心を助ける為なの。ひよには分からない？ ひよの心が泣いてるのが……レイにはこれが精一杯だけど、後はひなたが自分で頑張るの」

「何を頑張れって言うの？」

「自分で答えを出さなきゃだめ。そうじゃないと、意味がなくなっちゃう」

そんな事しないで、勝手に決めないで！

「そんなの知らないし、分からないよ！」

そう言っって私は立ち上がった。

その時、目の前が真っ暗になっていく。

「あ、れえ……………」

頭が痛い、足元がふらつく。

なんだか吐き気もする。

「何…………コレえ……………」

「ひなちゃん…………？ ひなちゃん！ どうしたの！」

「ひなた！？」

「おばあちゃん、早く来てえ！」

ひよの声とソレイユの声が聞こえる。だけど、それも何を言っているのか聞き取れなくなっていく。体が言うことを聞かない。

もうだめ、倒れそう。

朦朧とする意識の中、立っていることができずに私は倒れた。

「ひなちゃん、ひなちゃん！」

私は倒れたひなちゃんをゆする。だめ、反応が無い。

『お母さん達みたいに、このままひなちゃんが居なくなったら…』

すると、そんな考えが頭の中に浮かび上がる。

嫌、そんなの絶対に嫌！

私はぎゅっと目をつぶり、頭をふる。そうでもしないと頭の中からその考えを振り払うことができなかった。

……大丈夫、ひなちゃんは絶対にそんなことになったりしないし、私だけを置いていたりしない。大丈夫、大丈夫。

私は何とか心を落ち着かせ、おばあちゃんに訊ねる。

「おばあちゃん、お医者さんに連れて行ったほうがいいのかなあ？」

「そうだねえ……この様子だと、連れて行かなくても平気そうね。」

「よかったあ……！」

私はホッとする。

「ひより、ひなたは……大丈夫なのかなあ？」

レイちゃんも心配そうに覗き込む。

「うん……平気だとは思うけど」

たぶん、今日一日で色んな事があったから、疲れちゃったのかも。

「おばあちゃん、これからどうすれば良い？」

「とりあえず、ひなたちゃんを部屋に運んで寝かせなきゃだめよ」

私とレイちゃんはおばあちゃんの言う通りに、部屋へと運んだ。

「ふう……これでよし、っと」

やっと運び終わって一息ついたとき、私のおながが鳴った。

おなかの音が、静かな部屋に響き渡る。

「……あ、ははは。とりあえずレイちゃん、ご飯食べに行こっか？」

我ながら恥ずかしい……そう思いながら提案をすると、レイちゃんが悲しそうな顔をして、ふるふると首を振る。

「レイちゃん？　どうしたの？」

どうしよう、何かまずい事言っちゃったかな？

「レイはご飯、食べられないの。人形だから」

衝撃の真実。

ショックだった。皆でご飯を食べるっていう私の夢が、一瞬にして崩れ去っていく。

「え……そうだったんだ。ごめんね、こんなこと言って」

「ううん、いいの。だからレイはひなたに付き添ってるね」

レイちゃんってば良い子、偉い子だよ！

「レイちゃんが良いのなら。じゃあひなちゃんをお願いね」

ドアを開けたところで言い忘れていた事を思い出した。

「あ、ひなちゃんが汗かいたら傍にタオルがある筈だからそれで拭いてあげてね」

そう言って下へ降りる。

少し心配だけど、多分レイちゃんだったら大丈夫……だよな？

降りた時には既に、おばあちゃんがご飯を用意していた。

「ひなたちゃん、大丈夫だった？」

「うん、今は寝てるよ」

おばあちゃんも心配だったみたい。

「あら、レイちゃんはどうしたの？」

「あ、レイちゃんはご飯食べられないから、部屋でひなちゃんみてくれるって」

「そうかい、残念だねえ……」

私も残念だったなあ……折角ひなちゃんとレイちゃんと皆でご飯にできると思ったのに。でも、そういう事なら仕方ないよね。

私は諦めて、おばあちゃんとご飯を食べる。

「わあ、美味しい！」

「そう？ 余り物で作ったんだけど、喜んでくれておばあちゃん、嬉しいわ」

おばあちゃんの作るご飯は、どんなものでも美味しかった。私の腕だともっともっと、頑張って練習しないと到底かなわないことを思い知る。

「ねえ、ひなちゃんもそう思……」

振り向いた先には誰も居ない。いつもひなちゃんが座っている場

所、私の隣。

私は一瞬、ひなちゃんに話し掛けようとしてしまった。

「あ……ひなちゃん、寝てるんだっけ」

癖って怖いなあ……

そういえば、いつもならひなちゃんも一緒に食べていて、私とひなちゃんが楽しそうに話しているのを、おばあちゃんが微笑みながら見ていたのに。

ひなちゃんが居ないのを実感すると、私は急に寂しくなった。

「なんだか……寂しいね」

「そうね、ひなちゃんが居ないとこんなに変わっちゃうものなのねえ……」

それからその寂しさを補うように、私達は他愛の無い話をしながら二人でご飯を食べ続けた。

頭が痛い……

私は体を起こす。

「ここ……何処？」

辺り一面真っ白で、現実味が無い。周りを見渡すが、何一つ無い。なんだか頭の中が、ふわふわしてる。そういえば私、さっきまで何をしてたんだっけ？

確かひよがいて、おばあちゃんもいて、それから……………

その先は、頭に靄がかかったように何も分からない。

「とりあえず……何をすれば良いのかなあ」

することが何も無い。

仕方なく私は、歩くことに決めた。いつまでもここで座っていたって、何かが起こることも限らないし。

暫くの間、白い闇をかき分けて進む。が、進んだ気がしない。何処までも続く白に、心細くなる。

「どうなってるの？」

発した言葉は白い闇に吸い込まれていき、すぐに聞こえなくなった。どうなっているのだろうか。

「コレってきつと……夢、だよな。うん、絶対そうに決まってる」

こんな非現実的なこと、夢でしかないはず。そう思うと、とても気が軽くなった。

その後はもう、ただただ歩きつづけていた。自分では、もう何時間も歩いたのではないか、と思うほどに。

こんな所、いつまで歩けば良いのだろうか。そんな疑問が頭をよぎる。

さっきの場所はもう分からないし、それに本当に進んでいるのかも分からない。目印になるようなものは、此処には一つも無いのだから。

もう私は、自棄になってその場に座り込んだ。

「もうやだ！　こんな夢なら早く覚めてよお！」

すると、ぶつぶつと文句を言いながら向いた方向に、私は黒い影のようなものを見た。

「何だろう………」

目の錯覚なのか、それとも目が疲れているだけなのか？　それは人の形をしているように見えた。

ごしごしと目を擦ってみる。気のせいなんかじゃ無かった、その影は人の形をしていた。髪が長くて……女の子のように見える。

「あれ……なんだろう？」

それを見たとたんに関心を思い出しかける。

何だかとても大きなものを忘れている気がする。

見たことがあるような、ないような。

何かが引つかかる。そのせいで、何だったのか思い出せない。

それでも、何かが気になって胸騒ぎがする。

「……………何だか行かなきゃいけない気がする」

この行動がどんな事になるのだろうか、そんなことは既に頭の隅に追いやられていて、考えるよりも先に、私は黒い影に向かって走り出していた。

走り出したまでは良かった。

「…………え？　うそ、何で逃げるの？！」

私が走り出したとたんに影は、するすると逃げ出した。私も負けじと走る。だけど、影のほうが速すぎた。

「こんなのって、あり？」

私はこれでも一応、クラスの中で足は早いほう。当然ひよよりも早い、と言うよりも、ひよは論外だけど。

それでも、こんなに走ったのに追いつけないの……？

「もう、ちょっとくらい待ってよお！」

そんな事を言っても、当然待ってくれないものは待ってくれない。
黒い影はどんどん先へと進む。

こっちとしては、追いかける立場にだってなって欲しいものだけ
ど。

「それにしてもさあ……早すぎない?!」

愚痴をこぼしつつ私は、スピードを上げる。

少しずつ、少しずつ距離を縮める。

でも私が近づくと、影は離れていく。まるで鬼ごっこをしてるみ
たい。

「……あれ？」

そのまま走っていると、少しずつ視界が悪くなってきた。最初は
ほとんど分からなかったが、そのうち霧がかかったようになり、影
を見つけるのが難しくなってきた。

影を見失いかける。

どうしよう……走りにくいし、方向が分からない

辛うじて見えている影は、どんどん離れていく。

どうしよう………どうしよう！

ここで見失ったらもう終わり。勘だけど、そんな気がする。

心の中では今すぐ終わりにしたい自分が居る。でもこれは……これだけは終わりにしちゃだめって警告も出してる。

「待って！」

私は出せる限りの力で叫んだ。

すると、ぴたりと影が止まった。止まって………

「え………？」

その時の事は、私の気のせいだったのかな？ 一瞬、一瞬だけ影が振り返って、微笑った気がした。

第六話：レイの苦勞1

今のって……何？ 笑ったの？

でも、そんな事ありえない筈。だって影には顔が無かったのだから。

人の形をしているだけの影がそんな事できるはず無い。きっと私の気のせい、そうに違いない。

「でも、何でそんな風に見えたんだろう……？」

そんな疑問を抱えながらも、私は影に向かって走り出す。

すると、ふと違和感を感じた。

「？」

一体何なんだろうか。気になる。

追うのを止めて辺りを見回す。しかし、変なところは何処にも無い。

「あれれ？ おかしいなあ、何にも無いや」

今度こそ目の錯覚……？

さつきから変な事ばかり。一体何がしたいんだこの夢は、こんなちくしょう。

「まったくもう！　こんな夢なら早く覚めてよお！」

……あれ？　同じような台詞、何時だったか言った事あるような気がするなあ？

ま、まあいいや。兎に角影を追わなくちゃ何も始まらない。で、影は何処だっけ？

私は影を探した。

「……………」

思考停止《フリーズ》。一瞬間を置いて、元に戻る。私ってば一瞬固まっちゃったよ、うん。

周りを見ると、相変わらず真っ白な世界が続いている。その中には黒い人型の影なんて少しも見当たらない。

……どうしよう。

自分で「追わなきゃいけない」なんて格好つけて言っておきながら、自分で見失っちゃってるし。

「はあ……………」

口から盛大な溜息がもれる。

「もう……何時になったら目が覚めるのよお！」

腕をブンブンと振りながら、何も無い空間に当り散らす。

折角影を見つけたのに、また最初に逆戻り。私ってば本当にツイてない。あのまま影をつかまえる事ができたのなら、目が覚めたのかもしれないのに。

「ああ、もお！ やってらんない！」

そう言ってまた座り込むと、さっきの変な違和感を感じた。

？ 何だろう、今度のはさっきの時と何かが違う。

さっきは何も起こらなかったように見えたけど……………

そこまで考えると私は、ある異変に気が付いた。

「あれ……？」

白かった筈の周りが、少しずつ、少しずつ、濁っていく。それに続いて、私の立っている場所を中心に白かった世界が回っていく。

地面も揺れだした。

何だか……まるで度の強い眼鏡をかけた時みたいに頭がくらくらしてきた。

目が回る。それと一緒に目の前の景色が変わっていく気がした。白色から始まって、色々な色へと変わっていく。

頭がおかしくなりそうで、怖い。

私はうずくまり、ぎゅっと目を瞑った。そうすれば何も考えなくても済むから。

「こんなの……こんな夢なんて早く終わってよ………」

私は、いつ終わるのかさえわからない夢の終わりを願った。

目を瞑ってからどれくらい経ったのだろうか。まだ少しだけ揺れていたが、地面の揺れはおさまってきていた。

頬を冷たい風が撫でていく。いや、冷たいどころではないくらいに。

「寒い……」

吐いた息が白くなる。まるで冬みたいな寒さで、自然と体が震え出す。

「何処なの……?」

周りの景色は変わっていて、所々に雪が積もっている。足元には枯葉が落ちていた。

ここは見た事があるような、ないような。そんな感じがする。

私は辺りを見回す。

夢なのに、夢のはずなのに。そこはまるで、現実のように精巧に造られていた。

私は身震いした。これは寒さから来たのか、それとも――

『恐怖』その言葉を紡ぎ出そうとした瞬間、また風が吹いた。葉のない大きな枯れ木が揺れる。

木……あれは何ていう木だっけ。

「確か……」

刹那、私は奇妙な既視感に襲われた。

あれ？ 私はこんな所来た覚え……無いのに………？

頭の中で声が木霊する。これは誰の声？ まだ幼くて、舌足らずで……

『いーちい、にーい、さぁーん、……』

何かを数える声、笑い声、泣き声。色々な声がする。

この声……ぼんやりとだけど覚えてる、でも何かがつかえてはつきりとは思えない。

すると、大きな声でその声は叫んだ。

『ひなちゃんみいーつけた!』

その声が鍵となったように、私は唐突に思い出した。

ここは、昔ひよとかくれんぼをしたんだ。それで私は木の上に登って隠れていて。

その時は春で、花が咲いていたんだ、満開だった。

淡いピンク色に染まった視界の中、私はひよが来るのを待っていた。

その花は確か――

「……桜」

何で忘れていたんだろうか、私はその木を知っていたんだ。その木の場所も、何もかも全部知っていた!

頭の中で記憶が叫ぶ。他の忘れている何かも思い出そうと、必死に。

一歩踏み出すと、枯葉を踏むかさり、という音がした。

道理でどこかに似ていると思ったんだ、この景色は。

私は答えを求めて走り出す。かすかに残った記憶を頼りに、どこまでも、どこまでも。

走っているうちに段段と記憶が甦ってくる。

なんで私達はかくれんぼをしていたの？

……お母さんを待っていたんだ

なんでお母さんはそんなに待たせていたんだっけ？

……お母さんはここに人形を買いに来たんだ！

もしも私の記憶が正しいのなら、目的の場所はここを抜けた先にあるはずだ。

私は木と木の間を通り抜けながら走った。

きっとあそこにあの影が居るはず……！

これも勘だった。だけど私は、それを見つけた時、正しかったのだと知った。

視界が開けて、あるものが目に飛び込んできた。

そこには見覚えがあった。そうだ、確か――――

『佐伯工房』だった。

やっぱり私は正しかったんだ。

息を弾ませながら、近づいていく。私はドアに手を掛けた。

「ひなた、大丈夫かなあ……」

静かな部屋にぽつんと一人、布団に横たわっていた。その傍らには、部屋の雰囲気似合うとは言えない服を着た人形——レイ——が居る

レイはひなたの様子が気になるのか、しきりに顔を覗き込んでいた。

「汗びっしょりだあ……拭かなきゃ風邪ひいちゃう」

レイはポケットから自分のハンカチ——ローシェ手作りの人形サイズ——を取り出して拭いた。

しかし、そんな小さなハンカチでは拭ききれぬ筈は無く、すぐに使えなくなってしまった。

「どうしよう……」

レイは困り果てた。拭くものが無かったら、ひなたは風邪をひいてしまう。

辺りを見回した。

が、代わりのものは見当たらなかった。

「ひよりはタオルがあるって言ったのに……」

ひよりは置いておくのを忘れていたらしい。

探しに行こうかな。……でも勝手に探し回ってもいいのかなあ？

「う……ああ……………」

うなされてるし、また汗もかいてきてる……。

決断に迷うレイ。

「うう……レイはどうすればいいのよお」

仕方なく部屋を出た。

結局、一旦ひなたから離れてを取りに行く事にしたのだ。

「えっと……どこだろう？」

開け放してあったドアから部屋を出ると新しい問題が発生した。

ひなたとひよりの祖母の家は昔から大きく、ひなたとひよりと祖母が暮らすには広かったのだ。そのせいで勝手を知らない他人、しかもちいさな子供と同じくらいの大きさのレイにとっては迷路のようだった。

「場所……わかんないや」

目の前には少し長く見える廊下、部屋の数はもちろん、ひより達の居る部屋すら分からない。

あり?……ひより……ひより………あ!

「ひよりに聞けばいいのよ!」

だけどひよりは今、ここには居ないし、居場所すら分からない。

たしか……一階だね?

「ひよりー、どこなのー?」

階段下に向かって呼んでみる事にした。しかし、とても大声を出しているとは思えないほどの小さな声しか出なかった。

返事は無い。

「もうこんなに小さな声しか出なくなっちゃったかあ………やっぱりもう時間が無いのね……」

レイは階段を見て、はあ……と溜息をつく。

仕方ないかあ。階段を下りるのは怖いけど……

「やっぱり階段下りなきゃダメ……かなあ?」

普通の人にとっては階段を上ったり下りたりすることは何の造作も無い事だが、レイの場合は違う。レイは人形なのだ。エルフの涙で命を与えられたからといって、全てのことが人のようにできるわけではない。制限される事だってたくさんあるし、できないことだってある。

レイにとって階段は、自分の体の半分の大きさの段差だ。その階段を人形のレイが下りなければならぬのだ。躊躇するのは当たり前である。

「でも……」

そう言って、自分が出てきたドアをちらりと見る。暫くの間もごもごと何かを呟いていたが、意を決したようにきつと前を向いた。

「ひなたの為に、レイが頑張るんだもん！」

しっかりと覚悟して、レイは階段に足を掛けた。

「よいっしょ、っと」

片足が着いた。

次に両足を着けて、体を支える。

「やっと一段……これがまだあと十数段残ってるのかぁ……」

これ全部を下りるには骨が折れそう。まあ、それ以前に覚悟もぽつきりと折れるかもしれないけど。

でも、これも全部ひなたの為。そう自分に言い聞かせながら一段、また一段と下りていった。

第七話：レイの苦勞2（前書き）

前回から間が空いてしまつてすみませんでした。

最近忙しくなつてきたので次話も遅れるかもしれませんが、どんなに遅れてしまつても完結できるように頑張りますので、よろしくお願ひします。

第七話：レイの苦勞2

「ふああゝ、疲れちゃった……」

レイは階段の下の廊下で、服が汚れるのも構わずに寝転がっていた。相当疲れているようで、ぐったりとしている。

ついさっき階段を下りてきた所だった。

「ひよりの所……行かなきゃ」

それなのにレイの体は、ちつとも言う事を聞かない。

「ひなたが風邪ひいちゃうから早くタオル持っていけないといけないのにいゝ！」

力を入れようとはするが、疲れきった体には無駄だった。

……やっぱり休まないといけないのかあ。

「ここでじたばたするよりも、やっぱり休んだほうがいいのかなあ」
もう諦めた。動けば動くだけ力を消費してしまう。そうすればも
っと遅くなるという事が分かったからだ。

レイは目を瞑った。

「ひなたは何であんな瞳をしていたのかな……」

独り言が、ぽつりと口が出る。

レイがずっと気になっていたこと。普通の人ならあんな瞳をしている人は居ない……少なくともエデンでは。

人形に関係している時のひなたの瞳は、何時もあんな瞳をしていた……。

レイを見るとときもそうだった。

「ひなたがあんな目をしてると、レイまで悲しくなっちゃうよ……」

はぁ……、と溜息をついた。

「そろそろ平気かな？」

色々と考えていた間に体力は戻ったらしく、今度はすんなりと立ち上がる事ができた。

レイは廊下を見回した。

正面にはさっき下りてきた階段。そのほかには部屋がいくつかあるだけ。

「これならひよりの所まですぐに行ける……よね？」

難関の階段を抜けたから大丈夫な筈。

「よかったあ。これでひよりにタオル借してもらえる」

レイは安心しきっていた。これでようやくひよりに助けてもらえる、と。

……そのせいで、暗闇の中の光る二つの点に気がつく事ができなかった。

「〜♪」

その上レイは、重大な事を忘れていた。

「えっと、この部屋はあ……」

ドアを開けようと背伸びをしたとき、ぴたりとレイの動きが止まった。

「……………背、足りないや」

どうして気づかなかったのだろうか。少し考えればすぐに分かることなのに。

「どうしよう……何か、役に立ちそうなもの無いかなあ。」

レイは辺りを見回した。すると、いくつかのダンボール箱が積み上げられていることに気づいた。

ひなたとひよりの引越しの時に使われたらしいそれらの箱には、半年経った今でもまだ中に物が入っており、乗ったりするのは丁度良さそうだった。

「これなら乗れそう……でも、使っても平気なのかな？」

ちらりと階段の上へと目をやる。開けっ放しにしておいたドアから、ひなたの唸り声が聞こえていた。たまに唸り声に混じって「もう」とか「待って」とかの声も聞こえてくる。

「ひなたのために行かなきゃ……だよね」

しかし、そのためには自分の背の高さよりも高い、二段に積まれたダンボール箱をどうにかしないといけない。

どうすれば……どうすればいいのか。

「やっぱりこれ、崩すしかないの？」

ダンボール箱を見上げた。これを崩すのにも根気がいりそうだ。

さっきの階段といい、ダンボールこれといい、レイ、今日は何かツイてないなあ……

レイはそんな事を思いながら、積まれたダンボール箱を崩しにかかった。

「ふう……お腹いっぱい♪」

あのあと結局、おばあちゃんの作るお料理が美味しすぎた事と時間が遅くてお腹がすいたのもあって、ひなちゃん（とレイちゃん）そっちのけでご飯何杯もおかわりをした。

今は部屋にはレイちゃんが居るはずだから……ひなちゃんの所に行かなくても平気だよ。

私はのんびりと台所へお皿を運ぶ。すると、流しにお皿を置いた所でおばあちゃんが話し掛けてきた。

「ひよりちゃん、おばあちゃんがお皿洗おうか？ ひなたちゃんの所に行かなくていいの？」

「ううん、平気。ひなちゃんはきっと大丈夫だから、お皿洗っちゃうよ。それに今日はお腹いっぱい機嫌良いから、おばあちゃんの分も洗うねー♪」

「そう……？　じゃあ、頼むね」

私は呑気に鼻歌を歌いながら仕事に取り掛かった。

「~~~~♪~~~~♪」

最近の歌やら何やらはあんまり知らないから、昔お母さんが歌ってくれた童謡を歌ってみる。

「~~~~♪……………って、あれ？」

かちゃかちゃとお皿が音を立てている中、あることに気付いて、私は手を止めた。

「そういえば、どうしてタオルが首にかかっているんだろう？」

……………。

「あ、あははは。レイちゃんの所にタオル、あるよね。うん、きつとあるよ。そうに違いない」

そうは言っても、レイちゃんの所にあるはずのタオルがここにあるってことは…………。

「やっぱり、忘れちゃってたの…………よね」

レイちゃん困ってるかもしれない…………けど、困ってたらここに来るよね？ だったら私が行かなくても平気なんじゃないかな？

…………うん、大丈夫だよ。きっと大丈夫。レイちゃんだもん、大丈夫…………な筈。

そうして私は根拠の無い自信に頼り、皿洗いを再開するのであった。

「ふにゅう…………つ、疲れたよお…………」

結局、積まれたダンボール箱を崩す事には成功した……けど、ダンボールの中身の洋服はそこら中に散乱して、その上お目当てのダンボールは引っ張ったり落したりしたせいでよれよれになってしまった。

これでは乗る事が出来ない。

「どうしよう……これじゃ、使えないよお……」

辺りを見回しても、もう使えるものは何も無い。

レイは途方に暮れていた。

「……こんな時……赤ちゃんだったら、大声で泣けば誰か来てくれるのかな……」

また独り言が口をついて出る。

「ううん……レイは赤ちゃんじゃあないから、泣けたとしても誰も来ないもん……それに、それに……」

そこまで言うと、レイは首をぶんぶんと振った。

「もう独り言はおしまいっ！　こんな風にぶつぶつ言っても仕方がないじゃない。それよりもレイが散らかしちゃた物の片付けしなくちゃ」

そう言うとレイは、黙々と片付けをし始めた。さすがに自分で散らかしたものを放っておく事は出来ないし。

その時だった。暗闇の中から二つの光る点が近づいてきたのだ。しかしレイはまだ忍び寄る気配に気付いていない。

レイまであと五メートル。

四メートル。

三メートル。

二メートル。

あと一メートルの所で、レイは何かの気配と足音に気付き、振り向いた。が、レイのほうが一寸だけ遅かった。

「！」

振り向いたときにはもう遅く、それはレイに向かって飛び掛ってきた。

「きゃああああ！」

レイの悲鳴が上がる。それに続き、ばたばたと音がする。

「きゃあ！ やだ、離れてよお！」

しかしレイの上に居るものは一向に離れる気が無い。それどころかレイの上に乗ってこようとする。

レイはじたばたと暴れて抵抗したが、結局それに押しつぶされて

しまった。

「ふ…………ふにゆうう……………」

誰かあ……………レイ……………を、助け……………てえ……………。

何に襲われたのかも分からずに、レイは倒れた。

「ねー、おばあちゃん。何だか廊下が騒がしくない？」

私はお皿の片づけを終えて、おばあちゃんとリビングでくつろいでいた。

「そう？ おばあちゃん全然気付かなかったけど」

「それならいいんだけど……………」

さつきから何か聞こえるような気がするんだよね……………？

何だかばたばたしてて五月蠅くって、落ち着いてテレビも見れない。一体誰が何をしているんだか。

……………って、あれ？ ひなちゃんが上にいて、レイちゃんも上にいるんだよね。で、おじいちゃんはどういなくて、おばあちゃんと私がここにいてから……………。

あとは誰が残ってたっけ？

そこまで考えて、私は顔から血の気が引いていくのが分かった。

「これって……もしかして……………」

泥棒という言葉と、幽霊という言葉が頭の中で交互に点滅した。

私はその言葉を認識すると、フライパンを片手にそうっとドアを開けて物音のするほうへ歩いていった。

今ではさっきまで五月蠅かった物音はしなくなっていた。

シーンとした廊下に私の足音だけがする。裸足のままだったから、ぺたぺたと変な音がして何だか怖さが半減しちゃう……。

けどけどっ！ 相手は泥棒かもしれないんだし、気を引き締めなきゃ！

「でも……怖いようっ！」

私は半泣きのまま音がした所へ近づく。確かここらへんだったと思うんだけど……。

こっそりと覗くと、なにやら毛のようなものが左右に揺れていた。

「え……これって、というか物音の正体って……………」

それは私に気が付くと、尻尾を振って近づいてきた。それは私の手をぺろぺろと舐める。

「どんぐりい……お前の仕業かあ……」

私は力を無くし、へなへなとその場に座り込んだ。

『どんぐり』とはこの犬の名前だ。犬種はゴールデンレトリバーで、人懐っこい。おばあちゃんが昔から飼っていた犬だ。

どんぐりは可愛くて大好きなんだけどお………今だけは憎い。とてつもなく憎いです。

「うう……私の勇気を返せよお」

何だか一人で相撲を取ってたみたいで恥ずかしい。

私は落ち込んだ。

だけど、何故だかどんぐりはご機嫌で、おすわりしてもまだ尻尾を振っている。それどころか、目の前にある私の顔を舐め始めた。どんぐり、口……臭いよ………。

「そういえば……何でこんなに散らかってるのかなあ……？」

私とどんぐりの周りには、冬物の洋服が散らかっていた。これは確か……私とひなちゃんの洋服だった気が……？

「こら！　どんぐり、何でこんなに散らかしちゃったの！」

どんぐりはきゅうくんと一声鳴いて、項垂れた。……かと思うと、後ろを向いて洋服の山の中から、クリーム色の何かを引きずってき

た。

何だか見覚えのある色で……………って

「レイちゃん！」

私はすぐにレイちゃんに駆け寄り、抱き上げた。

「ちょっと、レイちゃん！ 大丈夫なの！？」

私が聞くと、レイちゃんはふにゃふにゃって目を開けた。今まで完全にぼたんきゅーしてたらしい。

「うにゃあ……………ろー……………しえ？」

寝ぼけ眼で、目を擦りながらレイちゃんが起き上がった。良かった、ちゃんと動いてる。

「レイちゃん、違うよ。ひよりだよ」

「ひより……………」

レイちゃんは起きると、私に今までの話を話してくれた。

「……………それでこの犬に襲われて、それからわからないの」

レイちゃんを連れて、私は部屋へ来ている。目的は一応ひなちゃんを看るため。さっきから話しかけてないんだけど。

「そっか、大変だったね」

私は、どうしてこうなったかよくわかった。

原因は私がタオルを置き忘れた事みたい。それでその後階段を下りてきたレイちゃんがどんぐりに襲われたって訳。

あれ？……ってことは、こんなに散らかったのも、レイちゃんがボロボロなのも、元を辿れば私が悪いって……こと？

私のせいだってこと、レイちゃんは言っていないけど……やっぱりあやまったほうがいいのか……。

あやまったほうがいいよね。私のせいでこんな目にあわせちゃったんだし。それに私もレイちゃんのこと、きちんと考えてあげなかったのも悪かったし。

……………うん、あやまろう。

「レイちゃん、私がタオル置いておくの忘れたせいで、大変な目にあわせて……ごめんね」

私は言った。

そのときの私は、怒られたときのどんぐりにそっくりだったと思う。

「ううん、レイがもっと……もっと、大きな声を出したりできればよかったの。だから、ひよりは気にしないで？」

私は、ぱっと顔を上げた。

「許してくれるの？」

「勿論」

にっこりと笑うレイちゃん。その笑顔につられて私もつい笑ってしまった。

「ありがとう」

そう言う私達は、顔を見合わせて笑いあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0115h/>

人形師の涙

2010年11月15日20時05分発行